梅下村塾 ⑦⓪

塾長 梅内拓生

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

東日本大震災から学ぶもの(6)

（旅は文化をつなげる）

古今東西の詩人や文人たちは旅をしました。俳句の風雅の真髄を求めて奥の細道を旅した俳人の松尾芭蕉は「月日は、百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり」と旅日記「奥の細道」に書いております。

〃五月雨の降り残してや光堂〃

平泉の中尊寺の五月雨に煙る金色堂を詠んだ俳句です。60年以上も前の私が子供の頃、梅雨時の雨で北上川はよく洪水を起こしました。芭蕉が平泉を訪れたときには北上川の水かさはどうだったのでしょうか。

これは、次の句に詠まれております。

〃五月雨を集めて早し最上川〃

五月雨で水かさの増した最上川は渦を巻いて流れていたのだろうと思います。田植時の恵みの雨は、時として洪水を引き起こします。

芭蕉の風雅の道を慕って、旅をした俳人の与謝蕪村も五月雨で水かさの増す河の不気味さを詠んでおります。

〃五月雨や大河を前に家二軒〃

どんどん水かさが増してくる大河、その河べりに立っている二軒の家、家の住人は既に避難したのだろうか、家の中で不安を抱えてじっとしているのだろうか。蕪村の句は押し寄せて来る津波を経験した者の心に強く響いてきます。

「森と水と命の惑星」国際会議と旅人の心

2012年5月に大船渡市と気仙沼市で開催した「森と水と命の惑星」国際会議のパネリストは世界を旅をした豊富な経験を持っている人たちでした。大船渡市出身で米国ロサンゼルス在住の鵜浦真紗子氏は異国の暮らしと旅で触れた暖かい心を被災した生まれ故郷の人々と共有し、地もとの人々を元気づけようと、地元の子供たちと一緒に世界で活躍している芸術家と協力して、子供たちが集まって描いた大きな絵を展示しました。

国際保健プロジェクトの実践と研究のため、世界を旅した東京大学国際保健学教室の国内外の仲間も、被災から立ち上がろうと努力している気仙の人々の心を世界の他の国々の人々と分かち合いたい、そしてそのために役立ちたいという気持ちで参加してりました。盛小学校、中学校で同級だった、千葉淳氏も釜石での心のこもった遺体処理と葬の経験を世界の仲間と分かち合おうために、パネリストとして参加しました。千葉 淳氏も旅の経験の後に釜石に住んでおり、地元で民生委員をして住民と心を分かち合っております。地元の小学校、中学校の同級生の鈴木孝親氏や隣組だった上野攻氏も会議の裏方を手伝い、地元の人々の気持ちを旅人である私に、いろいろ伝えてくれました。

（国境、歴史、文化、宗教を越えて）

「国破れて山河あり城春にして草木深し」、唐時代の中国の詩人、杜甫の詩の有名な出だしです。住田町のけせんプレカット事業協同組合で働いている遼寧省大連市出身の温秀輝氏は、日中文化交流のかけ橋として、現在の厳しい日本と中国の政治的関係の困難を乗り越えて働いております。パネリストとして国際会議に参加した温秀輝氏は、老子、壮士、孔子、などの中国古典からの教えと日本の文化とのつながりについて話をしてくれました。

バングラデシュの仏教徒でありWHOスタッフとしてニューデリー在住のS・バルア博士は、パネリストとして、会議には出席できませんでしたが、仏教の心も、世界の文化の奥にある心も通じ合うというメッセージを送ってきました。

米国人で、東京大学国際保健学教室で学んだ、S・マーシャル博士は帯広畜産大学の準教授をしており、キリスト教、イスラム教、仏教の文化を越えてつながる心が日本文化にあることを述べております。この会議の裏方として協力した、東京大学時代の仲間も気仙の歴史と文化の中に、世界と触れあう心があることを感じたと言っております。

外からの旅人たちは、このように気仙の心を捉えております。気仙は、これにどのように応えるのか、どのようなメセージと行動を世界に発信するのか。これを真剣に考える時が来ていると思います。